

変動する東アフリカ牧畜社会の食と記憶

長崎大学多文化社会学部 波佐間逸博

今日の発表は、ケニア北西部からウガンダ北東部に居住する東ナイル系の牛牧畜民、ドドス社会における民族誌調査に基づきます。

ドドス社会の食生活は家畜、とくに牛と山羊のミルクと血、そして、肉を基礎的な食品として成り立っています。しかし、近年、いろんな形で、とりわけ食糧援助という形で、外部社会から農作物やその加工品がもたらされました。それによって、彼らの生活がどのように変化し、また新しい食文化の状況がどのようにもたらされたのかについて報告します。

まず、ドドス社会の概要を説明します。ウガンダはコンゴ、南スーダン、ケニア、タンザニア、ルワンダと国境を接しています。ウガンダの北東部にはサヴァンナが広がり、ここは国内でもっとも乾燥した土地です。この地域は「カラモジャ」と呼ばれています。カラモジャ地域には、ジエ、ドドス、カリモジョン、ポコットという民族が居住しています。彼らはいずれも、牛、山羊、羊に強く依存した牧畜生活を営んでいます（図1）。周辺に、アチョリ、ディディング、トポサ、トゥルカナといった民族が分布していますが、アチョリとディディングは農耕、そして、トポサとトゥルカナは牧畜に強く依存しています。

ドドスでは、家族のメンバーたちは、半定住的な集落と、遊動的な家畜キャンプに分かれて居住します。半定住的な集落は、ドドス語で「エレ」と呼ばれます（写真1）。エレは数年に一度移動しますが、移動距離はわずかに数百メートル程度です。頻繁に移動する家畜キャンプと異なり、エレの周りには畑がつくられ、農耕がおこなわれます。平均的なエレには200人ほどの人々が暮らしています。主な居住者は女性と幼い子ども、そして高齢者です。

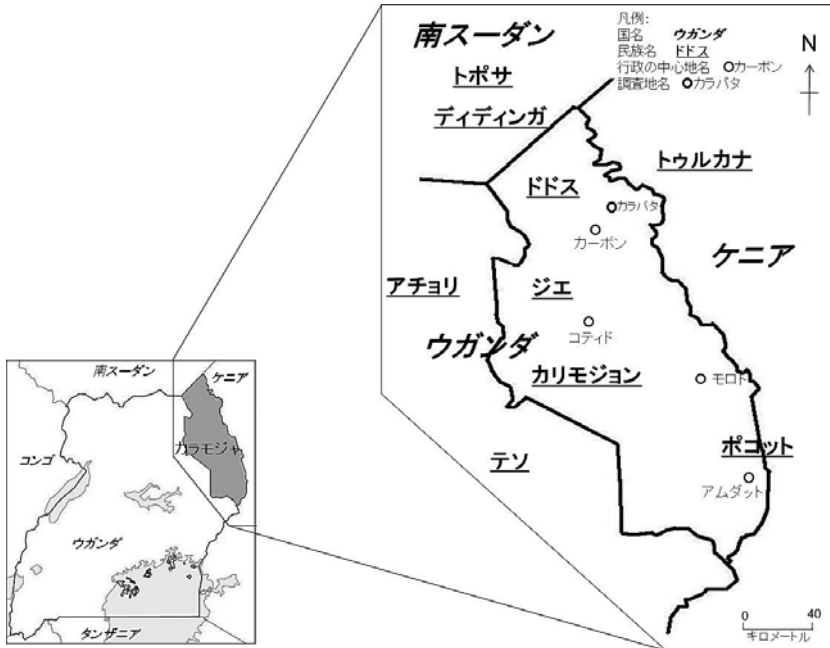


図1 ウガンダ北東部カラモジャ地域の地図

ところで、ドドスでは、標高800から1200メートルの平地では、年間平均800ミリメートル程度の降雨に恵まれますし、農耕が可能です。しかし、東アフリカの半乾燥地に共通する特徴なのですが、降雨量の年変動がとても大きく、しかも、どこで降雨があるのか、その場所はもちろん予測できません。ドドスの農耕は天水農耕であり、雨水の安定的な供給が望めないということは、安定した収穫も期待できないということを意味します。このような気候の条件によって、収穫物が皆無であるという不作の年がドドスではとても頻繁に発生します。南カラモジャで調査をした生態人類学者は、「4年に1回



写真1 半定住集落 (エレ)

という頻度で完全に収穫量がゼロの凶作が生じる」と報告しています。したがって、農耕は単独で生活を支える生業とは成り得ません。

この定住的なエレにも、ミルクを出す少数の泌乳牝が置かれています。家畜キャンプで家畜の群れの大部分を管理する一方、エレに居住している人々もミルクを利用できるよう、出産して日の浅い牝の家畜、特に牝牛をエレにとどめ置くのです。家畜キャンプは、ドドス語で「アウイ」と呼ばれます。青年男性たちが主な居住者で、多くの家畜とともに、牧草と水場を求めて頻繁に移動します。具体的には、数日に一度、数十キロメートル移動します。そのため、アウイでは生まれたての家畜の赤ん坊を寝かせるための、草を編んだだけの簡易的な造りの小屋を作るだけで、牧童たちは野外でたき火を囲んで眠ります。

ところで、エネルギー・フローの観点からの牧畜に関する規定は、人間が食料に利用できない植物資源を、血やミルクや肉など、家畜の身体に変換することによって成り立つ生活様式というものです。これはドドスの野生植物利用の実態とよく適合しています。数量データを参照すると、ドドスでは、家畜が食べる植物155種類のうち、109種類は人が食べられないものです。逆に、人が食べない植物197種類のうち、家畜は半分以上、109種類を食べてくれます。現地語で名前が与えられている266種類の植物のうち、人の食事や薬、建材に利用できるものは164種類（約62%）あり、さらに、家畜を介在させた225種類（約85%）が利用できます。野生植物の利用度を有意に高める家畜の存在によって、この乾燥サヴァンナは、直接的、間接的に利用可能な資源となっています。

アフリカの牧畜民の食生活を栄養摂取の側面から見てみましょう。図2は、アフリカにおける牧畜民の栄養摂取の傾向を示しています。東アフリカの牧畜民、マサイとトゥルカナについては、7～8割の栄養を、ミルク、肉、血という家畜の身体物質から直接得ていることがわかります。それに対して、タマシエクやフルベといった西アフリカの牧畜民たちは、家畜を売って得た穀物から5割以上の栄養を得ています。近年、貨幣経済がアフリカの奥地にも浸透していますが、東アフリカ牧畜民は、もっとも「近代化から取り残さ

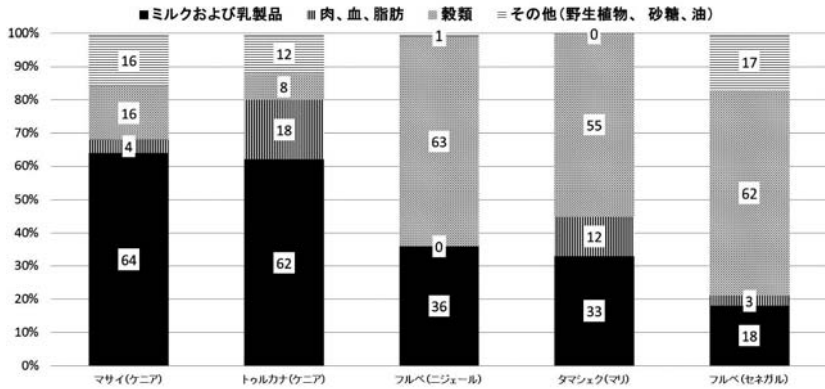


図2 アフリカ牧畜民の栄養摂取 (Galvin and Little 1999をもとに作成)

れた」とされるトゥルカナから、都市に近接し近代化の影響を強く受けているマサイまで、自給自足的な生業牧畜を営んでいると言えます。

カラモジャの牧畜民は、近隣の牧畜民集団による略奪から家畜を守ることを理由に、男性が家畜とともに頻繁に移動します。女性や子どもはエレで半定住生活を送りますが、その結果、乳児死亡率や5歳以下死亡率は、近隣のトゥルカナと比較して高くなっています。つまり、家畜のミルクへのアクセスは、牧畜民の栄養状態や全般的な健康状態の重要な決定因子であることが分かります。ドドスでは、1日で1人が約1.1リットルのミルクを得ています。これは乾季の値です。雨季は約3倍のミルクを得ることができます。乾季には726キロカロリー、雨季には2,178キロカロリーをミルクから得ている計算になります。

ドドスでは、主に牛と山羊から搾乳します。女性や子どもが朝と夕方一回ずつ、乳を搾ります。ミルクは生乳として利用するだけではありません。写真の子どもたちは、ヒョウタンにミルクを入れ、これを揺すぶっています(写真2-1、2-2)。ヒョウタンの中には酸乳が残っており、これが乳酸発酵のスターターとなり、新たな酸乳を作り出します。それとともに、揺すぶられたヒョウタンの中で、脂肪がぶつかって固まり、バターができます。このようなチャーニングの作業は、子どもたちが積極的に手伝います。



写真 2-1 エレでミルクの入ったヒョウタンを揺する少年



写真 2-2 アウィでミルク入りのヒョウタンを揺する少女

ドドスの食生活ではさまざまなミルクの利用形態が見られます。ミルクは生乳や酸乳として飲み、また、それらを家畜の血と混ぜて飲みます。酸乳からはバター、バターからはオイルが得られます。さらに、ソルガムなどの穀物を挽いた粉をお湯で練り合わせて作った練り粥と、生乳、酸乳、オイルを混ぜて食べることも一般的です。牛のミルクはドドスの人々の基本食料であると同時に、物質のおよび象徴的に、身体の機能と成長に関するドドスの文化の基本要素にもなっています。干ばつや紛争によって深刻なミルク不足の状態にあるときでさえ、人々は語りや歌、ことわざの中でミルクを称賛しながら強く求めます。さらに生乳は薬としても認識されています。生乳は、消化器系から内容物を取り除き、消化液の流れを回復するとともに、消化管を必須栄養素で再編するために摂取されます。また、私が聞き取りをした不妊に悩みながらも妊娠を望んでいる数名の女性は、生乳による伝統的な治療をおこないながら、クリニックで腹部超音波検査を受けていました。近代生物医療のトレーニングを受け、専門家の資格を認定されたドドス出身の看護師や衛生管理者も胃腸障害や全身倦怠、不妊症に対する家畜のミルクを使った「服薬法」を能動的に継続しています。多くの人々が「生乳は病の治療にとっても有効である。生乳は薬剤より強い効果がある」という見解を示しますが、種々の病に対する薬剤の効果を高めるために生乳を摂取する人もいれば、「ひとつの病に対して薬剤と生乳を同時に飲むことは避けなければならない」と

慎重な人もいます。

ドドスでは、一般的に朝夕の1日2回食事をとります。朝食は、ソルガムやトウジンビエの練り粥と酸乳を混ぜたアスポット (*asupot*) と呼ばれる食べ物です。夕食は、その練り粥と、野草である青菜をおかずにして食べます。夫婦と5人の子どもという一般的な世帯では、1回の食事でおよそ1キログラムの穀物粉を食べています。

主としてミルクや野生植物を食してきたドドスですが、度重なる干ばつによる食糧不足がきっかけになって、農作物は地域に広がっていきました。約60年前にドドスはトウモロコシの植え付けを初めておこなったと記憶されています。当時、モロコシとシコクビエは栽培作物として存在していましたが、トウモロコシとトウジンビエはそれまでドドスにはありませんでした。その年は干ばつであり、西方の農耕民アチョリの土地に、ドドスの人々は移住しました。そのときアチョリは、容量が4リットルの缶3～4杯のトウモロコシを山羊1頭というレートでドドスと交換しました。当時のトウモロコシの交換価値は現在の相場場の7倍以上でした。その後、南スーダンの農耕民ディディングから、山羊との交換によってトウジンビエが入手され、さらに1970年代の牛耕の普及によって、農作物の収穫量は大きく増えていきました。

家畜の血は、ドドスの人々の重要な栄養源です。血は主に牛の頸動脈から採血し、1頭当たり約2リットルの血を得ます。血を出すことで、牛の不妊などの体質を改善する効果があるとされています。写真3は、牛の頸動脈に矢を射ったあと、流れ出る血を容器で受けているところです(写真3)。血は、特にミルクが不足しがちな乾季には頻繁に摂取します。日常的には、血はミルクと混ぜて飲むことが好まれています。儀礼の場面で屠殺



写真3 矢を射った牛の頸動脈からほとぼしり出る血を屈んで受ける男性(左手前)

した家畜の血はそのまま飲みます。写真4は、ある儀礼的な治療のために山羊を屠殺して、胃を取り出したあと、腹腔に溜まった血を男性がすくって飲んでいるところです（写真4）。家畜の血はフィブリノーゲン、線維原素の働きによって、写真の男性が口にして血のように、すぐに凝固します（写真5）。日常生活で家畜の血を口にするときには、いつも、飲みやすく、また、加工しやすいように、血液中のフィブリノーゲンを木の枝で絡めとり、液体の状態を保ちます。

ドドスをはじめ東アフリカ牧畜民は、肉を得ることを目的として家畜を屠殺することはありません。人々は肉を好みます。しかし、個人が空腹を満たすために家畜を屠殺することはないのです。肉を食べる場合は限られており、病気にかかって死んだ家畜の肉を食べたり、また、友人や姻族を歓待する場合や、結婚や成人式の儀礼、病気の治療のために、儀礼に伴って家畜を屠殺し、人々が集まって一緒に肉を食べます。写真6は儀礼で屠殺した山羊を焼肉にしているところです（写真6）。アカシアの木を燃した火の上に直接肉を置いて焼き、それを儀礼の参加者たちはその場で切り分けて食べます。

なぜ、家畜を積極的に屠殺しないのか。その理由は、繰り返す食糧難に対応してきた歴史と関係しています。東アフリカでは、大きな干ばつや疫病、家畜略奪などが、群れの維持に壊滅的な打撃を与えます。牧畜民が生活して



写真4 治療儀礼で屠殺した山羊の腹腔に溜まった血をすくい取って飲む男性（右側）



写真5 固まりつつある血を食べる男性

いる乾燥地域は、しばしば強い干ばつに見舞われます。すると、食べ物を失った家畜は骨と皮ばかりにやせ細り、死亡します。斃死した家畜を食べることで、人々は自分がたおれるのを免れるわけです。つまり、家畜の肉には人々の生命の最終避難口としての役割があります。不安定なこのような環境のもとでは、家畜群が大きなエネルギーの保存庫となっているからこそ、家畜と共に生きる人々は、食糧難の危機的な事態を乗り切ることができるわけです。東アフリカにおける牧畜生活では群れを維持し、そこから生存に必要なだけの食糧を得ることを目指します。これは、市場向けに処分できる家畜の生産効率を最大限にすることを目指す近代畜産とは対照的です。



写真6 儀式で屠殺した家畜の肉は直接、焚き木にのせて焼く

また、人々の食生活にクリティカルな打撃となるのは干ばつだけではありません。ドドスの歴史から確認しておきましょう。ドドスは、年代の順を追って歴史を記述する編年体を使いません。人々が特定の過去を表現する際には、会話している相手が了解できる出来事に言及します。例えば「彗星が流れたとき」「〇〇という場所で干ばつが起きたとき」といった表現です。このような出来事暦の中で、干ばつ、紛争、家畜の病の流行によって引き起こされる飢えや、食料援助にまつわる食の記憶は重要な役割を果たしています。

例えば、1960年代には2回、大きな干ばつに見舞われていることが記憶されています。まず、干ばつと近隣民族との牛をめぐる略奪紛争により、1961年に大規模な飢餓が発生しました。「アロロヨの年」、つまり「痩せの年」という意味です。雨がなく草は枯れ果て、家畜は土を食べ、人々はトゥルカナとの関係が悪化して移住もできず、死んだ家畜を食べ下痢をして死んでいったと記憶されています。当時、ドドスの居住地域には医療施設は皆無であり、この年の直後にはじめて外来診療部門のみを備えたヘルスセンターが町にで

きました。

また、その4年後には、干ばつによる食糧不足が起こり、食料援助が実施されています。「カドゥンゴの年」です。雨がなくドドス全土で深刻な飢餓に見舞われ、わずかな穀物粉（大人1人にマグカップ4杯分）が配られました。今では食料不足を乗り切る方法として多くの人々がおこなう、小家畜（山羊と羊）を売って穀物粉を手に入れる取引がはじまったのはこの年です。

そして、1970年代には牛耕が普及します。背景には、牛耕をおこなっていた少数の家族が豊富な収穫を支えにして、1965年の「カドゥンゴの年」に、飢餓の影響を受けなかった事実を、周囲の人々が認知したことがあります。

1970年代は政権が比較的安定していたのですが、1979年にはアミン政権がクーデターによって転覆します。すると、当時カラモジャの中心地モロトにあった軍の駐屯地の武器庫から、数万超といわれる自動小銃が流出し、牧畜社会に持ち込まれます。この銃を手にした略奪集団によってドドスは繰り返し攻撃を受けて牛を奪われ、さらに干ばつが追い討ちをかけました。1980年の「ロピアルの年」です。草も家畜も人も、すべてが一掃された年という意味です。「ロピアルの年」には、赤十字社によって干し魚が配られましたが、魚を食べる習慣のないドドスの味覚と臭覚には、強い抵抗があったことが記憶されています。その4年後には、干ばつが再び発生し、食料援助が実施されています。自動小銃の流入以降、カラモジャでは武装暴力による家畜の略奪が頻繁に発生するようになり、社会は大きな負の影響を被ることになりました。

1990年代にも2度、出来事暦の中に食料をめぐる記憶が出てきます。1994年、「アトゥルカンの年」は、干ばつと紛争によって、人々はエスカープメント（大地溝帯）を下り、隣国ケニアのトゥルカナの人々の土地に逃れ、食料援助を受け取っています。トゥルカナの土地には1992年にカクマ難民キャンプがつくられ、エチオピアとスーダンからの難民が当時40万人も生活していました。ドドスの人々はそこで食料配給を受けました。1998年にも、干ばつと紛争のために、人々が最も高い価値を置いている牛を売って、食料を得ています。

2000年代は、2005年に飢餓が発生していますが、この記憶の中で、飢えの原因は干ばつではなく、紛争です。カラモジャの牧畜民たちに過剰な暴力を行使しながら押し進められた、政府による強制的な武装解除のもと、ドドスは駐留する国軍と、隣接する牧畜集団の中から組織された略奪者集団と激しく対立します。戦禍から逃れて人々は集落を離れ、ブッシュに身を隠して生活し、家畜の群れは南スーダンに逃れます。ミルクへのアクセスを失った人々は飢え、国際 NGO が食糧支援を実施しました。これが「アロウノイの年」、つまり「ロープの年」です。食料配給所で、サプライヤーである団体がロープを張って人々の立ち入り禁止区域を設けたことが由来です。

東アフリカ牧畜社会では、1980年代に各地で飢餓が発生し、それ以降、国際的な開発援助機関によって、大規模な人道支援が行われるようになりました。ドドスも例外ではありませんでした。配給食料の典型的なものは、トウモロコシやソルガムといった穀物の粒やそれを挽いた粉、そして植物性の調理油です。トウモロコシとソルガムは地元でなじんでいるものとは異なり、粒が硬すぎて、アナカキネットと呼ばれる新しい病気を引き起こしています。植物性調理油は「政府の油」と呼ばれ、「何か別のモノ」を混ぜて作られており、味がしないと不評です。この「政府の油」もアキドンゴリという病を引き起こしています。

2011年にドドスの家族の家長や既婚女性に、自身や家族の病気エピソードを聞き取る病歴調査をおこないました。このデータによれば、繰り返し罹患している主要な病気は10種類ありました。アナカキネット、アキドンゴリは、80年代から90年代にかけて、前10年間より2倍以上、病者の数が増加しています。そして、アナカキネットの病者数は、2000年代にも前10年間から倍増しています。

援助食料による新しい病、このアナカキネットとアキドンゴリについて見てみます。アナカキネットの語源は「吸うこと」(*akinak*)であり、「腹の中のものを吸うこと」によって引き起こされる病態という意味です。ミルクやバターをとらずに、援助食料の硬い粒のソルガムやトウモロコシを食べると起こる病気です。症状は、腸の中で穀物がとどまり、腸と接している腰が痛

くなるとともに、胃の左側から横隔膜、そして心臓に痛みが及びます。さらに、便秘が激しくて、血便を引き起こします。そのほかに、食欲減退、嘔吐、下痢、胃の膨張、死といった多様な症状がよく知られています。アキドンゴリの語源は、アキドン (*akidong*)、つまり「去勢する」というものです。植物性調理油が原因となって不妊となるもので、1981年前後に流行したと記憶されています。人々は、初めて手にした政府の油を、食物の中に直接入れるだけでなく、伝統的なバターオイルと同じように、直接ゴクゴク飲むということを行いました。その結果、盲腸が硬く腫れて、女性の場合は、その盲腸の隣にあるアペリット、つまり子宮が押されて傷つき、不妊に陥りました。男性の場合は、ンガゴロイという部位、つまり膀胱と睪丸の間にある筋肉に傷がつき、不妊になります。アペリットもンガゴロイもマッサージ治療をおこないますが、指先に小石のような腫れ物が確認されます。

病気を得た人々の言葉から、ドドスたちの認識する病気が単なる消化器系の疾患や、生殖器系の疾患であるばかりではなくて、生活の困難を表現する足がかりとなっていることが理解できます。そこには、病者自身が周縁化された現状に対する嘆きの声を、病の語りの中に織り込んでいるようにさえ感じ取れます。最後に、その具体例を見ておきます。

以下は、40歳代男性の語りです。

「バスを銃撃した容疑で警察と軍に拘束された。誤認逮捕だった。妻が私を釈放するための現金を得るために、援助食料のソルガムで醸造酒を造って、兵士たちに売った。牛は奪われ、ミルクも金も食べ物もなく、妻と子どもたちは醸造酒を搾ったソルガムのかすを食べた。3歳の息子がアナカキネットになった。ミルクもバターもなく、政府の硬いソルガムが腸を傷つけた。妻は酒売りで町に出ていた。3日間、息子はそのままにしていた。嘔吐、熱がつづいて、伝統医に診せたとき、血便が始まった。牛がいてミルクを飲んでいれば、こんなことにはならなかった。軍隊や敵、銃がなければ、こんなことにはならなかった」。

この男性の語りにおいて、息子のアナカキネットの症状の原因は、援助されたソルガムであり、その背景には、家畜を含む食料の不足があります。ア

ナカキネットの出現は、1980年代の銃の流入と軍の駐留、銃を使った家畜略奪の激化、それらによる食生活の変化とを重ね合わせて認識され、新しい時代の社会的混乱の病として出現しています。牧畜生活になじみ深い伝統的な食料が豊富な時代と、外来の食料への比重が高まった飢えの時代とが対照的に読み込まれ、自分たちがいる今現在が示されています。

ドドスでは2000年代に入り、女性たちが酒を醸造し、それを販売して、現金を手に入れるようになりました。地元の人々だけではなく、駐留している陸軍兵士が主な顧客です。「この生計活動のために、現在、飢えはかつてほど深刻ではなくなった」と人々は口々に語ります。また、女性が現金収入を手に入れ、家計の経営主体として独立したポジションを確立できるようにもなっています。しかし他方、男性が語ったように栄養の改善を目指して国際援助機関が配給した主食穀物(モロコシやトウモロコシ、ソルガムなど)は、母親たちによって現金獲得を目的とした醸造酒づくりの原料とされます。つまり、食料は子の栄養状態の改善には直結しませんでした。さらに、醸造酒の残滓(残りかす)を食べることが、子のアナカキネットの最も主要な原因となっています。

新しい食べ物に対するドドスの人々の基本的な態度は、否定的なものであると言っているかと思います。新しい食べ物は、しばしば「冷たい食べ物」とか「政府の食べ物」と蔑まれます。しかし、他方で、人々はこのような新しい食べ物が、干ばつや紛争によって地域全体が飢餓状態に陥ったとき、自分たちの生を救済するものであることを経験的に知っています。そうであればこそ、新しい食べ物への不満を述べていた人物が、入手の困難が少ない、改善された現代の食生活について、とうとうと熱弁を展開するという二律背反が生じます。

国際人道支援はこれまで、食の安全性に対してイノセントな人々の社会に対して実施され、真空の中で展開すると想定されてきました。しかし、食糧の緊急援助は絶えず変化する多元的な食文化体系の内部で生起しているということを、人々の日常生活のフィールドワークから了解できます。この現代の食をめぐる社会動態の実情を、グローバル市民社会の一員として押さえて

おきたいと思います。人の食物や食生活に対する人の価値判断というのは、単純に割り切れるものではありません。食物の感覚的、社会的、物質的な領域における経験は、重なり合いながらも矛盾しあう複数の層によって成り立っていると考えられます。